

富山日報

小 天 地
昨日和蘭村で自決したの役
水な女房に委して置いて今に
も欠けしうな堤防に電で
りを描つて居る男を見つて
うだぬれりつて一と聲出す
「ハハハ澤山居ますよ」
情つて居るなとつて一と心
した(冷光)

薄志弱行

エヌ夫人

素より公然許された譯でなく、無断の
家出で、學費のおくりは勿論、花枝
は着がえの衣類さへ持つて居なかつた
た。僅に、兼々小使の内から少しづつ、貯
金して残して置いた十五圓ばかりの金を
旅費に、母様の遺品に預いて、肌身離さ
ずもつて居た守刀と古流り珊瑚の金簪
これだけを持ち出して、誰一人たよる人
もない東京へ、はる／＼出て来たので
最初の一月二月、それは宿の主人に
頼んで守刀を賣つて貰ひ、金簪を抵當に
食費の支拂ひもさうやら斯うやら済して
来たもの、三月目の今はもう如何する
ことも出来ない、衣類だつて衣更の季節
になつて、氣の早い人はもう白地の浴衣
も着て居やうといふ時候なのに、花枝は
まだ袷を着て居る、この袷云ふのも、
もろ綿入れであつたのを、それでは餘り
だからといふので、一晩眠らず、大急ぎ
に袷だけ引出して、袷に仕立かえたやう
な譯なのである。

「間違ひではなかつたか？」
花枝はかう心に自問しないで居られ
なかつた。

「間違ひかも知れない、間違ひでない迄
もさうなくとも無謀であつた。」
本の奥で叫ぶこの言葉を、花枝は幾度と
なく打消し、強て薄志弱行と冷笑し
去らうとした、けれどもそれでは如何し
ても氣が済まない。

「あなた何處へ？」
突然に聲をかけた男の事を思ひ出した
それは雨のじめじめ降る日の夕方であつ
た、花枝が神田のさる處へ用足しに行つ
ての歸途、小川町の停留場で待ち合せて
居る、其處に男が一人立つて居て、最
初は花枝の様子をじろ／＼見て居たが、
暫くして突然傍によつて来て、馴れ／＼
しい言葉をかけたので。

「富山です。」
わざとさつぱり無愛想に云つたのだが
男は何も馴れ／＼しく。

「今日はお芝居にでも参つたの？ 僕は
ねえ、大の芝居好きです、若し御都合が
好いなら一緒にいらつしやい、何處か
そこらへお伴をいたしませう、おつきあ
ひなさいな、好いでせう。」

「そんな事云つた、花枝は思ひ出

すわけでも、云ひ知らぬ侮辱を感ずるに
は居られない。

「私は何だと思つたのだらう？ 若しかく
て、墮落女學生と一つに見たんぢやなか
らうか、だれさういふ、墮落女學生と
わけ違ふ？ このだらしない身なり、下宿
へ持つ金さへなくて、毎日これといふ學
問もせず、都の町をぶら／＼うろつて
居る、あ……」

花枝は口惜しさを胸で泣いた。

「お母様、お祖母様！ 花枝が惡うござ

いました。ですが私は、あ、私は薄志弱
行なのでせうか、困難にまけたのでせう
か。」

花枝は目をつぶつて、兩手の指を組み
合せ、静に思ひ決しようとした。(完)